新春文芸 つづき

俳句の部

十五年を生き得しわれや初春の風（CO被災者）　三川指導部　町　佳郎
ボーナスも潤いとはならぬ年の暮れ
貧しさも道連れにして年越えぬ

新春を迎える妻の手はせわし　三川指導部　平田光男
新年を妻は電話で語り合う

坑口の師走の風よ身にしみる　三川指導部　松永一郎
木枯らしに裏の木の枝丸坊主
みぞれ来て子等のよろこびかけめぐる

退職者の会　高椋龍生
ためらわず人とし生きる初日記
屠蘇にちょっと酔いたる妻のめでたさよ
雑煮に目なかりし父でありしかな

家内無事を蕎麦で祝うて年明ける　三川指導部　赤川富幸
団結を祝う年賀の声便り
初仕事終えて今年も無事願う

川柳の部

停年の初のお屠蘇に酔いつぶれ　三川指導部　畑田栄
初夢は三本線の友がふえ
団結の二字へ初日が照らしつけ

氏神もアップアップの詣で客　三川指導部　町　佳郎
かるた取り七福神も来て遊ぶ
不況風マイホームの夢も吹きとばし

たてまえと本音がからむ長談議　三川指導部　弥永善治
商魂が成人式を飾りたて
災害が起きて直ずか危険箇所

鉱帽の三本線もつかれはて　三川指導部　松永一郎
休憩の妻に見せたしこの寝顔
スクラムだ不況の風も何のその

闘勝と安全祈る初日の出　三川指導部　田中正人
若水を祖母は蛇口で汲む時代
お転婆の娘を泣かす訪問着

元旦へ鉱山（ヤマ）の子父の無事祈る　三池太郎
書き初めの「平和」と「保安」鉱山（ヤマ）に映え
母の味匂う故郷の初春（ハル）楽し

狂歌

停年の年となるらん　この俺は
やめたくもあり　やめたくもなし
（三川指導部　・猿渡宗男作）

短歌の部

悔多く年逝かんとす余裕なき生活（くらし）に迫われし妻見れば愛（かな）し　三川指導部　町　佳郎
かるた遊びに加われば楽し子の三人（みたり）すこやかなるを幸と思いて
亡き夫（つま）よ初春（はる）の風吹けりわが家にも子らと供えん汝が好みいし酒

板付に立ちて吾が子を送る日に雲なき空を嬉しく思う　三川指導部　平田光男
気の強い妻もさすがに遠い空仰ぎては祈る吾が子の旅立

成田山大勝寺の広き本堂に元旦の入日朱く華やぐ　退職者　木村守
みそか朝家出て元旦の夕遅く家路につけるそんな業あり
大根占町根占町の標示よむ佐多岬への道初々づくし

戦争への道につながる生休廃止深夜作業をわれら許さじ　退職者の会　高椋龍生
生きるための戦車を作り軍艦を作るてふ人の論理許さじ
屍を戦野に晒す遺骨らも立ち上がり有事立法反対叫ばむ

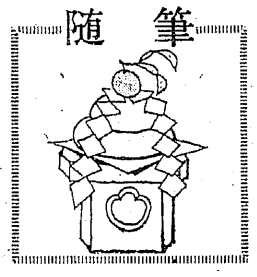
落葉焚く煙まつはりくる庭に一事に思い凝らさむとする　退職者の会　松原直吉
坂道の非力見せじと城壁を仰ぐしぐさに息を整う
復元の竪穴住居を本物と見居たる妻とまた笑い合う

新春文芸について

今年は、かなりの作品を寄せていただくことができました。なかには、短編創作などあと半分ほどを次号にまわさざるを得なくなりました。おわびしますが、本紙を今年もよろしくお願いします。

——編集部

随筆



言葉について思う

「ぢいちゃん」と「ばあちゃん」と

退職者の会　斉藤一好

「ぢいちゃん」、「何ばいうか。俺はまだぢいちゃんじゃなかつぞ」
「ばあちゃん」
「まあ。あたしはまだばあちゃんじゃなかつよ」
これは、等しく帰ってくる言葉である。
なぜだろう。いつまでも若くありたい。また、若い者には負けないぞという気持はわかる。年齢的な淋しさのあるところへ、ぢいちゃん、ばあちゃんではいささか抵抗を感じるのも当たりまえだ。
ぢいちゃん、ばあちゃんとは、何もできないポンコツ人間という考えが心の底にあるのではないだろうか。だからぢいちゃん、ばあちゃんに抵抗を感じるのではないかと思う。
だが、何も「ぢいちゃん」「ばあちゃん」を否定することはないと思う。世の通例として定年を過ぎればぢいちゃん、ばあちゃんと呼ばれる。またそう呼ばれるからといって、おかしい年でもない。
呼ぶ方としても敬愛の念がこめられている。先輩に対する尊敬の念がぢいちゃん、またはばあちゃんといわせるのではないか。
であるならば、何も否定する必要はなく、喜んで受け入れるべき言葉ではないだろうか。むしろ、誇りとすべきではないかとさえ思う。
明治—大正—昭和、と生き抜いてきたその遇しさ。
あの殺人者たちが造りだした戦争と、資本家が利潤追求のための悪らつな合理化、そして差別と続けてきた攻撃に対して、この身で、この腕で切り抜け、闘ってきたのだ。
誰にも負けないこの大きな誇りこそ、ぢいちゃん、ばあちゃんの言葉のもつ最大の財産である。
ゆっくり温泉にいり、風情を楽しんだ。温泉の水のうまいこと、私は水筒に入れて持って帰りたいの中で清められ、今もなお変ることなく脈々と流れ続けている赤い血潮。まだまだ精神的にも、年老いてはいけないのだ。まだまだ若い者に負けてはいけないのだ、という気持をもってこそ、もっともっと長く生きることもできるのだと思う。私共には、しなければならないことが沢山ある。
昔から大切な、誇るべき過去の足跡について伝える役目はぢいちゃん、ばあちゃんときまっている。
戦争を二度と繰り返してはならないということ。
そして資本家との闘いを忘れず、労働者として歩いていく道。これまでただなにげなく呼び、呼ばれていたぢいちゃん、ばあちゃんという言葉の意味が、思えばこんなにも重く感じられるのである。それをこれまで自分自身は果たして、どのように理解してきていたのだろうか。
口ではわれわれの祖先が、搾取と差別に血と汗にまみれ、苦しみ抜いた封建的な支配を憎むとしながらも、心の中では、あるいはその存在を許してきたのではないだろうか。このあたりで、ぢいちゃん、ばあちゃんという言葉のもつ意味を見なおして見る必要があると思うが、どうだろう。

× ×

旅行記 ××××××××

人吉の旅

四山指導部　岩下武文

十一月十二日は、昨日から降り続いた雨で旅行も気がかりだった。しかし、荒尾駅に定年退職者を含む人たちが笑顔で迎えられ、心の中は晴天になった。いろいろなごむ話をして列車にのりこんだ。車内は熱気で、三川の組合員の方々も後の席で、もうやっておられた。私たちも景色をみながら、人吉まで退屈することなく着いた。この頃は雨もやんで、旅館からの迎えのバスがきていた。
「人吉は、相良氏七百年の城下町で、人吉城跡は大林横穴群、青井神社、および願成寺等とともに観光価値を高めていて商店街も活気があった」（世界大百科事典参照）
城跡も当時を思い出させるものがあった。本丸、二の丸、三の丸と御下門址等。杉の大木にイチョウやかえで、もみじが所せましと繁って美しかった。そこに公園があり、前に球磨川が大きく広がっていた。
ゆっくり温泉にいり、風情を楽しんだ。温泉の水のうまいこと、私は水筒に入れて持って帰った程である。翠嵐楼（泊った旅館名）は由緒ある所だそうで、建物の作りが凝っていた。
明けて球磨川下り、球磨焼酎に舌ずつみをうった。濁った急流になげ出された私たち。不安な顔は一つもなかった。他舟のガイドが澄んだ声で、より楽しい舟の旅ができた。ならの瀬、ふたまたの瀬等、五つの大きな瀬や数々の瀬で、今にも舟が大岩にぶつかりそうになってヒヤリとしたことが少くなかった。二時間余りをひとっ飛びで球泉洞に着き、ガイドさんたちと別れた。
球泉洞は、球磨川の奇勝、槍倒しの大岩の上に、人工トンネルで姿を表わし、全長二千メートル余りの九州最大の鍾乳洞といわれる。七十メートルの天井は、坑内と違ったものを持っていた。各所から照らされる変化のある照明が無気味な美しさをただよわせていた。
ここにはコーモリが三万匹もすんでいるとか。大自然の芸術には三億年余の歴史があり、美しさは目をみはらせた。
帰路は、バスのなかで疲れて眠ってしまった。

×

組合員、主婦の皆さん。皆さんで地域や職場はもちろん、グループなどで旅を楽しむ人が少くなさそうです。どうか、こんな手記を本紙に寄せてください。写真（なるべく白黒）があれば、なおよいです。どうかよろしく。

編集部